

昭和59年度

長久手の方言

長久手町郷土史研究会



長久手の 方 言

郷土史研究会第三部会

浅井 千鶴子

加藤 正 時

坂谷 茂

川本 春 一

中野 十四夫

山本 鶴 善

川本 勝 美

日比野 義 信

は じ め に

言葉は社会構成の中で生き続け、時代とともに移り変わりつつあります。なかでも各地域に根ざした母なる「方言」は顕著な例といえましょう。戦後の社会変革、特に昭和30年代からの交通・通信の画期的な進捗によるマスメディアの発達で、長い間、郷土に生まれ育まれた特色のある方言が少しずつ姿を消し共通語へと移り変わりつつあります。これはいわゆる標準語化への道をたどっている訳です。郷土色豊かな方言は時間とともに消えていく運命にある時、長久手言葉（方言）について掘り起こし再考してみました。

長久手言葉は数多くあり、それが集落に限られたもの、町内一円のもの、そのほか地域全体にわたるものと多種多様です。これらの方言も現在の日常生活の中で生き続けて使われているもの、改廃されて失われていったものも数多くあります。町内で知人に会って話す場合や家族で話をする時など、その気安さから自然と方言が出てくるものです。これは普段使い慣れているとともに地域内での親近感の表現ともいえましょう。しかし地域外の人や見知らぬ人と話す折りには、互いに自分を意識してよそゆきの言葉遣い（共通語）で話し合うものです。地域内

で普段使われる言葉に「バンゲ(夕刻)」「ヨウサ(夜)」「ゴゼン(御飯)」などがある。こうした方言(昔言葉)も高齢者間での使用頻度は高いが、年齢とともに低くなってきているのは一抹の寂しさを感じざるを得ない次第です。

長い間、使われ、親しまれてきた長久手町内の方言も自然になくなっていく運命をたどっている時、私達の長久手町郷土史研究会第三部会は「長久手町内の方言(昔言葉)」としてまとめてみました。しかし限られた時間の中で十分な調査研究が出来なかったのが心残りです。積み残し分については、今後の研究課題とし、ここに報告する次第です。

長久手町郷土史研究会第三部会

部長 日比野 義 信

目 次

1. 年 中 行 事
2. 衣 食 住
3. 生 活 用 語
4. 生 活 用 具
5. 家 族 用 語
6. 子 供 に 使 う 言 葉
7. 子 供 の 遊 び 用 語

古語・方言の調査について

古い時代のなかで生まれ、或るものは亡び或るものは存続し、長い歴史を経て言いつがれてきた言葉。そのなかには、長い期間のうちに意味がおき替えられたり、新しい言葉に入れ代ったり、当てた文字のために本来の意味が失われたり、或いは全く消滅してしまったものも限らない数であろうと思われます。世代の移行によって言葉もまた新旧の交代がなされ、古い言葉は自然消滅の形となって消えて行くが、遠く先祖代々共に生きてきた貴重な文化財であります。そこでその調査に先立って、古語や方言などの真意の追求のため日本語の伝播伝承及びその体質に関しての大まかなところを調べてみました。

今日まで日本語の起源をめぐって幾つかの仮説はありましたが、いまだに謎の中に含まれているといわれています。その中で最も有力と思われるのは、さきに南方語が入り（縄文時代、中後期根栽農耕と共に伝わった）、弥生時代になって米栽農耕（米栽農耕は縄文後期に伝わったという説もある）とともに、中国中部（江南）から、中国語を交えてウラル、アルタイ語、特にアルタイ系の言葉が伝わって来た。（アルタイ系＝トルコ族、モンゴル族、ツングー族、満州族）、また米栽農耕は朝鮮

半島を経由して伝わって来たとも考えられ、アルタイ系朝鮮語も伝えられたともいえます。またアイヌ語も日本語に大きな影響を与えていることは事実だと思われます。（梅原猛 アイヌ語の日本語起源説）

こうして弥生時代中期に日本語の基ができ、それから長い期間に海外の言語が複合し同化と流動を繰り返しつつ日本語の形が出来上がったのです。（参考 小学館日本の歴史① 直木孝次郎）

そしてその言葉は、言語の系統経由、伝播の地域などによっての、ものの表現や質の相違、生活、風土などの地方色が加味されて、いわゆる方言となり、それぞれの地方で伝承されて来たのです。封鎖的な日本人の気質が他国との往来をさげ方言を長い間その地方にとどめていたことが、世界に類をみない言葉の多様性をもった国民にしたといえましょう。

また、こうした地方色のある方言・古語とは別に、仏教からでた言葉も非常に多くあります。例えば、「阿呆」＝（アホウ^{アホ}）は愚か者、などの意味に使われているが、仏教では「啞法」といって無言の修行の意で啞し（オシ）のように黙っていることで、その黙っていることから愚かというのに転じたといわれています。「挨拶」＝（アイサツ）は禅宗で指導者が、門下の

修行者と問答して悟道や知見の深浅を試みることをいったものです。また「御馳走」＝（ゴチソウ）も仏教語で、かけ走ること、他のために奔走して材料を集め煮たきをしてもてなす利他行をいい、転じて食事に用いる言葉となったのであります。（曹洞宗永見寺歴より引用）

こうした仏教語や渡来語が民衆のなかに浸透し定着して、日常語として使われ、伝承されて来たといえましょう。

年 中 行 事

ナヌカ正月 1月7日 正月松の内最後の日、一家揃って祝う。この日七草粥を食べる。この行事は正式には室町時代中期ごろから形が整えられ、徳川時代に至りて五節供に加えられ最初の日となった。

サギッチョ 左義長＝サギチョウ（三稔杖）
1月15日の前日の朝に行く。どんど焼きともいう。古くは三稔杖といった。子供達が前日までに部落の家々を廻り正月の松飾りやシメ縄や古いお神符などを集め川原などで焼く。この火で餅を焼いて食べると病にかからないといわれる。また書き初めを燃しその灰が高く揚る程文字が上達するともいわれる。古くは平安時代三稔杖（稔打ち）の意で青竹三本を立て上に日の丸扇、或は御幣をつけこれに松飾りの類を積んで焼く。起源は中国の元旦に山臊（人を食う魔物）を追い払う爆竹にあるというがはっきりしない。正月にもろもろの悪魔の霊を追い払う火祭りである。

ハツカ正月 1月20日の正月の神祭りの終りの節日、常食を神に供えて祝う。承応年間までこの日に鏡開きを行った(一説には寛永9年)1963年=以後に改められたともいう。

オハナガラ 花柄餅=ハナガラモチは旧2月15日釈迦涅槃の日で寺では涅槃会が行われ参詣詣の善男善女子供達に色模様に練り込んだ花柄餅を与える。この行事は推古天皇(628)奈良元興寺で行われたのが初めである。

コウボウサン 弘法大師祭りは旧3月21日 御影供(ミエク)という。弘法大師の御正忌 承和2年3月21日(835)入寂この日高野山では大師の像の御衣を替る行事をする。延喜10年(910)以降、年々行われて来た古式である。

オンゾ 御衣祭は旧4月13日 この日はハタ織りを休み織機に神酒を供え、女子は一日休暇をとる。

チュウ 中夏至という。6月21日頃陰歴で5月中ばで、一年中で太陽が最も上(中天)に来た時故(中)という(黄径90度北回帰線の最上)。以前農家ではこの日をめどに田植えの準備をする。このチュウ前後に一斉田植えが始められる。

ハンゲ ハンゲ(半夏至)、夏至(ゲシ)から11日目、この日から5日間を半夏至(ハンゲショウ)という。田植はおそくともこの日までに終る。半夏至半作といって半夏を過ると稲の稔りが悪いといわれる。梅雨の明けるこの頃はよく大雨などがある。

クマンクセンニチ 九万九千日、旧7月10日 観音の結縁日、この日参詣すると九万九千日の功德があるという。浅草観音など普通四万六千日といい、これを欲日といって京都の清水寺、大阪の天王寺では千日詣りといっている。甚目寺、半田の岩屋観音などは九万九千日という。

オンカオクリ 火振りとも浮塵子^{うたか}おくりともいう。夏の土用に入り

りて三日目、部落の人又は子供が出て松明を振って田の畦を廻り稲の害虫を焼き（誘蛾灯）に蛾を誘い集めて焼き殺す（夜間）。昼は子供が集って旧6月16日藁で斉藤別当実盛を作り孔雀や旗を担ぎて害虫から稲を守り豊作を祈念する祭りである。

ハクハッ
タイ 百八炬火。盆の行事 旧7月13日の精霊迎え火に対し十五日新盆の精霊送りの火祭りで、仏説百八の煩惱に基づき百八把の松明を川岸などで焚いて精霊送りの祭りとする。もとは恐い悪霊や亡霊を追い払う祭りの変化である。

ウラボン 孟蘭盆会 旧7月24日でウラボンは地藏盆の事でもある。又これをシマイ盆ともいって終る。

エベスコ 旧10月21日恵比須講。この日は一年中商略を省した罪を抜い神罪を免れるため誓文払い。神社に参詣して恵比須の掛軸に酒、鯛、赤飯などを供え子供達にみかんを与えてほどこしをする。また

1 1月5日の地作り恵比須とは異なる。この地作り恵比須は田の神が田の守りを終り田から上がってこられるのを迎える信仰の事である。

オ タ ヤ お速夜＝（オタヤ）といい、速夜は忌日におよぶの夜であって忌日の前夜に営む仏事（念仏）のこと。釈迦 忌前夜十四日 道之忌日前夜二十七日である。

衣 食 住

ド ウ ギ (胴着=ドウギ)

絆天様式で綿入れ、男は筒袖袖、女は元禄

サ シ コ (刺子=サシコ)

綿布の裏表に重ね合せ、一面にこまかく刺縫いした
もの。消防手の絆天、柔道着など。

ア ツ シ 絆天様子で単衣

カルサン (軽 =クルサン)(カリサン)

モンペに似た作業袴

ズ キ ン 帽 子

ノ ノ コ (布子=ヌノコ) 木綿の綿入れの小袖

デ ン チ (でんちこ)

綿入れ木綿の袖切の上衣(袖なし羽をり)

ウ デ ノ キ (腕抜=ウデヌキ)

紺木綿の布で作った腕カバー

テ ゴ (手護=テゴ、手甲=テコウ)

紺木綿で作った手の甲をおおう布

モ モ ヒ キ (股引=モモヒキ、腿引き)

タイツに似たズボン形の着衣。下着用と作業用と
ある。作業用は紺木綿、下着用は白木綿の布で総
て男性一般。

ハバキ (絆穿=ハンバキ) 紺木綿の布で作った脚絆

ハシヨル (端折る=ハシオル) 着物の裾をからげる

イチョウラ (一張羅=イチョウラ)

羅(ラ)夏の絹のうすものので、一般に一枚
だけの晴れ着の意。

ミ ズ (耳穴=ミミズ) 糸を通す穴、針のミズなど。

ボッコ (反古=ホゴ)(没古)
ホゴの転でホコと同意。廃品、不用品のことを言う。

(食)

ゴゼン (御膳=ゴゼン) 食事、または飯

オコワアー (御強=オコワ、強飯=コワメシ)
この地方一般に赤飯のことをいう。

アサメシ (朝飯=アサメシ)
昔は四度食で早朝はチャノコで、朝飯は午前10時頃にたべることをいう。

チャノコ (茶漬残り=チャヅケノコリ)
前日夕食残りを茶漬けにして食べる。朝早く飯を炊く前に野良に出る時等にする食事。又早朝炊いた飯もチャノコといった。

ゴジハン (午食飯=ゴジキハン)

昼食、午後2時~3時頃の食事。一般にオヤツとは、旧時刻八ツ時未刻が午後2時~3時になり、このときの食事が転じて間食のオヤツといわれるようになった。

ヨウメシ (宵飯=ヨウメシ)

夕方遅くの食事。昔四度食の農家では夕食がおそく夏期は午後8時を過ぎ、冬期でも7時過ぎになった。

コガシ (粉菓子=コガシ)

大麦を石臼で挽いて粉沫にし、少量の砂糖を混ぜ合わせて子供達に菓子として与える。

オブクマイ (御仏供米=オブクマイ)
仏壇などに供える飯米をいう。

タバヤー 食べなさい。

スルメン するめ

ダーコ 大根

カブラ かぶ

ジャガタラ 馬铃薯(じゃがいも)

(住居)

オトグチ (大戸口=オオトグチ)

普通農家の出入口(玄関)に取り付けた普通1間の木製の戸を大戸という。頑丈な造りで耐風耐震構造になっている。留守、夜間は大戸を閉め落し鍵をかけ、出入は大戸に付いた切り戸(クグリ戸)で出入りする。

シンヤ (新家=シンヤ)

アラヤともいう。分家して新しく建てた家。

ムウカラヤ (麦藁屋根=ムギワラヤネ)

ネ 麦藁でふいた屋根。またそれをカヤブキともいう。

デ エ (出居=デイ)

デイはイデイの変化。昔応接間、客間に当てられた座敷の様、昼間は客間に当てるが夜間は家族同

室の寝所にする。仏壇、神棚など置く。又タンス等の道具をおく場合もある。敷物は畳。

デヤアドコ (台所=ダイドコロ)

普通家族の居間、古くは炉(イロリ)を造り炉を囲み食事をした。その後家族の雑談など、また女子は針仕事などする、板張りにござなどを敷く。

ナンド (納戸=ナンド)

デイの北側、タンス、長持などの道具をおき、着替え化粧部屋に当てる。又若い夫婦、或は年寄りのみの寝所にする場合もある。

オカッテ (お勝手=オカッテ)

普通ここでは調理、煮炊きなどはしない。戸棚、飯びつ、膳部等食器類を置き食事をする。板張でござなどを敷く。

ナカド (中戸=ナカド)

ダイドコロとデイとの間の間仕切戸、総板戸で頑

丈な帯板と柱で出来ており、台風地震などのとき、すじがいの役目をする構造。

ツリテン (吊天=ツリテン)
吊天井(ツリテンジョウ)の簡略化した言葉。

マヤ 間屋(マヤ)
普通農家の出入口(玄関)の右側に有り、物置場で、昔は此処で馬を飼っていたところからマヤと言う。

ハンヤ (半屋=ハンヤ)
物置小屋、屋根が片下り半分に造ったため、この名がついた。肥料、肥桶、農具などを置く。又半屋には便所が付属する。

セド (背戸=セド)
家屋の裏の敷地内、雑任場、風呂場、井戸、洗濯場などがある。

ゾウシバ (雑仕場=ゾウシバ)
背戸口を出た所、母屋の廂の下、またその廂に簡単な屋根を取りつけ、流し台、食器棚などをとり付け、鍋、釜等食器類を洗う。又野菜なども洗う。調理もほとんどここでする。

ニワ (庭、三輪土=ミワド(タタキ))
屋内の土間、普通四坪内外の広さ。ここで扱すり、俵作り、雨天、夜べなど作業場となる。片隅に唐臼などの道具を置く。

カド (門=カド)
屋外の庭、粃、麦などを干すため広い場所を必要とする。

ツボノウチ (坪の内=ツボノウチ)
家屋やカドの周辺の植込み、一般にお庭という処で、普通農家では坪の内は造らないで家の周辺には柿、栗などの果樹を植え、裏は竹藪がある。

生活用語

シヨウジグ (仕様地口=シヨウジグチ)

チ 住居として仕切った土地の出入り口で、通常家敷への出入りする通路をシヨウジという。

セッチンバ (雪隠場=テウズバ)

普通雪隠場と書く。大小便所、排泄を人目から隠す意。

テウズバ (手洗場=テウズバ)

チ 大小便所、普通ハンヤに付属する。昔、紙など使用しなかった時代一般民衆は便所に水瓶か鉢に水を入れておき、排泄後手で水をすくい洗った。そこから手洗場(テウズバ)の名がついた。現在のお手洗の語源である。



アサアーザ (朝間=アサアイダ)

朝の間(アイダ)の簡略語、朝食事から午前10時頃の間

ヒルメヤ (昼前=ヒルマイ)

午前10時頃より午後2時頃まで

ヒルカラ (昼から=ヒルカラ)

午後2時頃より日没までの間

バンゲシマ (晩餉仕舞=バンゲシマイ)

夕餉時近くになり仕事を仕舞うの意。夕食の仕度をする頃

ヨウサ (夜更=ヨウサ)

普通ヤコウと読む。この地方では夜に入って午後9時か10時までのことをいう。

ヨイノクチ (宵の口=ヨイノクチ)

主に夕食後の時間帯をいう。

ネシマ (寝仕舞=ネシマイ)

深夜、人の寝静まった頃(夜更)のことで、夜更とは、戌の刻=五ツ時(午後10時)までで、初更から五更まであり、三更は子の刻九ツ時(午前0時)になる。

ワガタ (汝方=ナガタ) お前の方、お前達

ワガタシ (汝の宅=ナガタク)

ワレは汝(ナレ)の転でワガタシはナガタクの転化した言葉

オラアタ (俺方=オラガタ、オレガタ)

俺の家、自分達、男のことば

オチヨ (オッチュチヨイの略)

調子者、ひょうきん、オチヨにのる。

オックバイ (お蹲い=オックバイ) 正座するように座る。

オデク (お木偶=オデク)

木彫りの人形、土人形(泥偶)。この地方では人形一般をオデクといった。

オラガ (俺家=オラガ) 自分の家をいう。

ワヤク (枉惑=ワヤク)

無理非道、無茶の事だがこの地方では、いたづらをする事をいう。

ヨオケ (余多き=ヨオウキ)

余りが多いの意で弥多、タントなどをいう。

ヤボ 地名、ヤブタ(荒れた処、ものの出来の悪い地)のヤブから来た言葉の転化で、荒れる、出来の悪い人の意。

チヨウラカス (だます) 口車にのせる、又子供をあやす。

チョゴム (ちよごむ)
腰を落してちょこんとうずくまるようにする。

ゴンカ (ごんか)
地名ゴンド(荒れた不毛の地)から来た言葉で荒れる、無法者。

シャガム (屈む=カガム) 全身を小さくすることを言う。

ゼァアシヨ (在所=ザイシヨ)
村、田舎、故郷の意。この地方では主に生まれ故郷をいう(家族)。

ゼァアゴ (在郷=ザイゴウ) 在所、在郷、同意語

アンバヨウ (按配よく=アンバイよく)
塩梅と按排との混合語。塩と梅酢で味をつけたことから。もとは料理の味加減から出た言葉で物事の具合、調子。

ヘケラカス (ひげらかす) 見せびらかす。

セエル (据る=スエル) 置く。

ホカル (ほうる) 投げる。

テァアゲ (怠気=タイゲ) おっくう。体がだるい。

バンゲ (晩餉=バンゲ)
夕食の意だが、この地方では一般に夕方、また夜のことをいう。

シヨガネル (背負がねる=シヨガネル) 背負う、しよう。

オウデァア (横泰=ウオタイ)
満足、心が満ち足りて安泰になった。

サヨ (作要=サヨウ) 小まめに要領よく動く。

カンシヨウ (釋性=カンシヨウ)

荒しい性格、狂気じみた荒々しさ。

サヤアダケ (オ長けな=サイダケな)

ニヤア 才智が良いの意だが、出過ぎたシャラクサイの意にいう。

トロウ (途労=トロウ)

むだな労力から来た言葉で愚かもの、ばかもの。

カラスネ (空脛=カラスネ)

くつ下、もも引き等をつけない素足の脛をいう。

タルウ (垂い=タルイ)

かっかりする、淋しい、愚か者、弱々しい、疲れたの意味にも使う。

ギザ (兆=キザシ) 未来のことを予測、えんぎ。

マル (まる)

古いアイヌ語、排泄の意。小便などする時にいう。

アヨブ (歩む=アユム) 歩く。

グワア (具合、工合=グアイ)

何かがうまく進んでいるかどうかの状態、またはその進め方、或は調子。

ヒズガナイ (元氣=ゲンキ)

元氣がない、しょんぼりしている、弱々しい。

オブ (負う=オウ) 背負う。

ボウ (追う=オウ) 追いかける。

ツバキ (唾=ツバキ、ツバ)

ヨド (淀=ヨダレ)

ベロ (ベロ) 舌

ワヤ (誑=ワヤ) 不法、無理な事、無茶苦茶

エエコロ いいかげん

ヤクテ わざと、知っていて反した事をする。

ヤシム (卑む=イヤシム) 卑下する、さげすむ。

ケナルウ (けなるい) 恙しい。

オソギァ (恐がい=オソガイ) 恐しい。

ダチャカン (将明かん=ラチアカン)
きまりがつかない、駄目

ハンカン (反响=ハンカ)
言い返す、反発、強く言い返す。

ユウ (悠=ユウ)
動作が緩慢な人、ユウタクな人ともいう。

ツマシイ (俚しい=ツマしい) 俚約、きりつめる。

クベル (くべる)
焚く、タキギ、などの可燃物を火の中へ入れる、
また火の中に入れて燃やす。

クドバ (竈場=クドバ)
カマドで飯を炊き煮物などをする処。片隅に醤油
樽、みそ桶、漬物桶など置く。近くに家の裏への
出入口、背戸口(セドグチ)がある。

オキ (哉燠=オキ)
マキ、ソダなど焚火やその他可燃物を燃やしたあ
との火。赤く熱した炭火、残り火をいう。

ムダゴト (無駄事=ムダゴト)
ムダゴトともいう。おもちゃやおもちゃ遊び、又
何かをもって、或はいじって無駄な時間をついや
す事。

グニガエル (馬に帰る=グニカエル)
老人ボケして幼児のような言動をする(馬に帰る)

ア マ (アム = am)
女。古代朝鮮語アム = 牝 → 妹、妻の意でありアマ
はアムの転化した言葉と思われる。

ネブル (ねぶる) 言語でネブル、賞めるの意。

チイト } (ちよっと) 少し。
チョユット }

ヨソウ (よそう)
準備を整えるの意の変化。盛る、つける。

チチュウ (遅躊 = チチュウ) 躊躇、ためらう。

ヒドロイ まぶしい。

タチゴウリ (立氷 = タチゴウリ)
湿った地表で土をもちあげて立つ氷。霜柱。

ガマツ (蒲窟 = ガマツク)
川や池などの岸で水に浸食されてえぐられ、草な

どに覆われて陰になったところをいう。

シガラ (簾 = シガラミ)
土砂の流出、水の浸食、土堤の崩壊などを防ぐた
め杭を打ち込み竹などで編んで造る。

ペ タ (片 = ペラ)
二つに割った片方。片ペタともいう。

ベチベタ (辺方 = ベチ)
側の意。家の東ベチは東側、川の向うペタは向う
側。

メヤアロク (垂直) であって正しい状態もとも。

ソロク (真碌 = マンロク) 真直、水平。

ソウレイ (葬礼 = ソウレイ) 葬儀の意。

オゾイ つまらない、考えのない。

イカラコイ 舌をさすような味

ブットク 放っておく、打ち捨ておく。

シトナル 成長する、育つの意

ハグレル 道連れを失う

ハンマクラ 予期に反する、当がはずれる。

スヤクル 表面をつくろってごまかす。

ゴウワカス 腹を立てる、業をわかす。

クダレル くだされるの音節が脱落

アヤカス あざむく、ちょうらかす。

イコス 物をくれる。

ショベツル 片手でさげる。

ナマカワ なまけもの、なまかわ。

タテゴ (建具=タテグ) 障子、戸等

ジュルイ 道路が雨水等で表面が水をふくんで、やわらかくなって歩きにくい所。

ヤニコイ 面づくさい、わずらわしい。

マタイ 確実、全し

タアケラシイ 馬鹿らしい

タイダイ わざわざ

ヤットニ なかなかに、容易に。

ネツカラ 一向に、さっぱり。

アダニ (間=アイダ) なかなか

ウツクショウ すっかり、ことごとく、きれいに。

ケブタイ 煙むたい(けむたい)

ヌクトメル 暖める(あたためる)

エレル 入れる(いれる)

カヤス 返す(かえす)

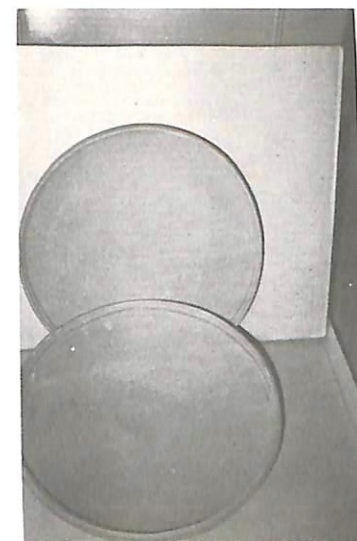
ホジクル 堀る(ほる)

生活用具

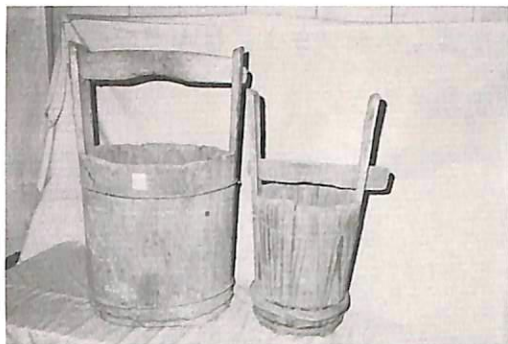
ハンゾ 半曹(ハンソウ)、はんぞ。井戸端に置いて朝夕、手顔を洗う。



ホウロク 培烙(ホウロク) 素焼の平なべ。魚、玉子等を焼く土器。



テオケ 手桶(ておけ) 水の持ち運び、一時保管する等に使用した。



オゼンバコ (御膳箱=オゼンバコ)

個々の食器(茶碗、汁碗、湯呑、箸など)を入れておく漆ぬりの木箱。箱のふたを仰向けにしてその上に食器をのせて膳の代りにする。

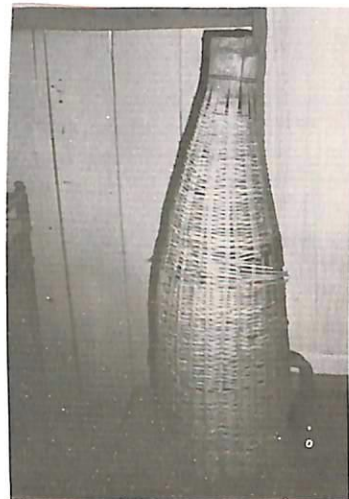


キャアジャ (貝杓子=カイジャクシ)

クシ 掬う部分に貝をつけた汁などを掬う杓子の名が訛った言葉で、この地方では汁など掬う杓子のことをキャアジャクシといった。

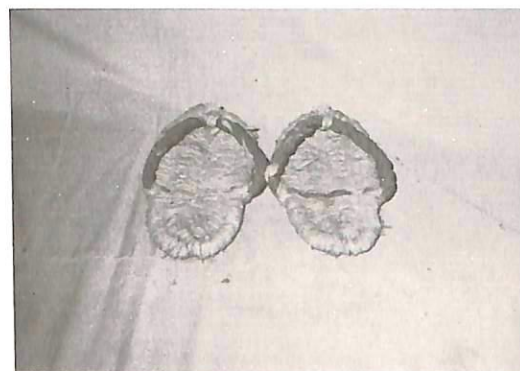
ウゲ (釜=ウゲ)

細い割竹で編んだ筒状のもの。水に沈めて置きどじょうなど捕る。また池など水を落して魚を捕る。ツキウゲがある。



ジョリ (草履=ゾウリ)

イグサなどで作ったはきもの。ワラジョリはワラで作ったもの。



アサブラ (麻裏=アサウラ)

裏台を麻で作った草履。又は裏台をゴムにしたのもアサブラという。

ビク わらで編んだ入れもの。俗にいう魚籠(ビク)とは異なる。背負ったり棒でかついたりする。

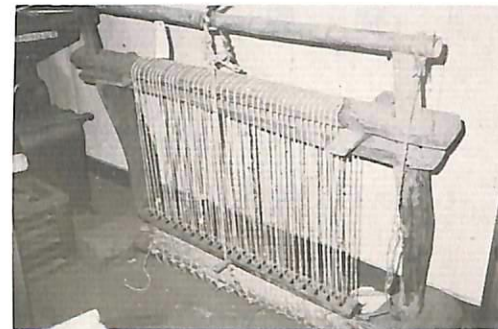


モッコ (畚=モッコ)

細縄(藁、麻)で編んだもの。土、草など入れて棒でかついで運ぶ入れもの。

コモゲタ (菰桁=コモゲタ)

俵、石菰、敷物などを編む道具



キャアズリ 菰、俵等を編むに用いる細い縄

ツツクロ (筒罎=ツツクロ)

菰桁に付属する道具。長さ10cm位、直径3cmぐらいの同筒形のもので、その大きさはきまっていない。普通自然木の切ったもので作る。2ヶ一對俵は五対で編む、これにキャアズリを巻きつけ菰桁に前後に振り分けて下げ藁を差し入れて交互に前後して編む。

家族用語

ヂイジ	(祖父)	ヂッサ、ヂッサマ、ヂイチャン
バアバ	(祖母)	ババサ、バアチャン
トツア	(夫)	オット
オトツアン	(父)	トウチャン、オヤジ
オッカア	(母)	カアチャン、オフクロ
カカサ	(妻)	オッカ
ニイサ	(兄)	アニサ
ネエ	(姉)	アネサ
ボウ	(坊)	男の子
オボッコウ	(おぼこ)	うぶ、純真

社会交通

オオカン	(往還=オオカン)	
		往来する道、街道。この地方では家の近くの広い道をいう。県道等
キャアド	(街道=カイドウ)	

広い道路、県道など車の往来する道。

サバ	(砂盤=サバン)	耕上の下の基盤
ヤゲンス	(薬研洲=ヤケンス)	道路面に出来た穴ぼこ。薬研のようなくぼみから出た言葉。
スヨケ	(洲除=スヨケ)	大雨など出水時の災害防止のために築いた堤防。

子供に使う言葉

ベーベ	着物
カンコ	下駄
タッタ	足袋、靴下
ジョンジョ	草履
マンマ	御飯
トット	魚又は肉類
ダンダ	風呂

子供の遊び

- オジャメ お手玉のこと。
ヨラメ 硝子で作った、一円玉ぐらいのおもちゃ。
インチャン じゃんけん。
カクレンボッコ かくれんぼ。
ボウヤイ おにごっこ。
オシクラコ おしくらまんじゅう。

農耕用語

- トンモ (田面=タノモ)
田の表面、田んぼ、野良。
サラタ (晒田=サラシダ)
乾田、二毛作をせず植付けまで晒しておく田。
ノマダ (沼田=ヌマダ)
湿田、一年中乾燥しない水田。

- ノマル (沼る=ヌマル)
水かさが異常に増す。雨水などの流水で田の水があふれること。
アト (畦溝=アコウ)
田の畦を切って作った用水の取入れ、排水の溝。
イミチ (井道=イミチ)
用水路、イミヅ(井溝)も同じ。
イリ (杵=イリ)
池の水の落とし口、水抜き、また池などの水の出るところ。
タクネ (田柵=タクネ)
田起し、特に水田の田起しをいう。
ヨシヤケ (葎焼=ヨシヤキ)
葎などの刈草を集めて冬期の田の中で焼く。それから来た言葉で野外(屋外)でする焚火一般をヨ

シャケといった。

シンキリ (新切、新拓)

キリは切り開くの意で開拓古語である。

シ コ (酒講=シコ)

隣人、友人などが集まって酒宴を催すこと。

ベ ト (泥土=デイド) 泥

タローオケ (たる桶=たるおけ)

通常人ふん、水等を畑に持ち運ぶ時に使用する。

ションベキ (小便桶=ショベンオケ)

人ふん、小便、水等をおかついで運ぶ桶。

ヘンテコ (片手籠=ヘンテゴ)

手籠、腰に下げたりする、魚籠に似た形の籠。

ハタゴ

織機(シヨツキ)はたおり。



トーウス 唐臼(トウス)

乾燥した粳をひいて米にする道具



ディアガラ 米搗 玄米をついて白米にする道具。

トウミ 唐耳(トウミ)

農耕で収穫した穀物を風車を廻して選別する道具。

ハンド 水がめ(カメ)

飲料水の蓄水に用いたり漬物をする場合に使う。



天 候

ヒヨモ 日面、ヒオモ、日当りのよい暖かい場所

シブチ 飛沫雨、シブキアメ
俗に時雨(シグレ) 冷たいシブクように降る雨。

ツイリ 梅雨入り、ツユイリ
梅雨期に入ることの意であるが、雨の降り続くことを、ツウリまたはツウルともいう。

ケサメ 毛雨 ケサメ
細い雨、糖雨、霧雨、などである。

ザンザ 暫些雨、ザンザアメ
にわか雨、通り雨、をいう。

オテントウ
サマ 太陽(タイヨウ)
エエヒヤナ
アシ よい天気、晴れた日

オホシサマ 星(ホシ)

ヨウダチ 夕立(ユウダチ) 雷(カミナリ)
むす

イキル イキリ暑い=むし暑い、堆肥の中がイキッている
=発熱している。

動 物

オンツ 雄(オス)

メンツ 雌(メス)

ツボ 田螺(タニシ) つぼどんともいう。

ヘンビ 蛇(ヘビ) くちなわ

イノタ イノシシ
 ホッポ 小ねずみ
 オコゼ 毛虫(ケムシ)
 チンチンコ 蟻地獄
 アリンコ 蟻(あり)
 ダンマグツ 蛙の子 オタマジャクシ
 ヒキタ 蟻蛙(ガマガエル) ヒキガエル
 ギャアロ 蛙(カエル) カワズ
 ウケス 目高(メダカ) ウキス
 センペラ 名から来た言葉。(センバラ) タナゴ
 メソ 鰻(ウナギの幼魚) シラス

植 物

ジジババ 山蘭、春蘭(シュンラン) ハツコウリとも言う。
 ヤシマ アカシヤ=ニセアカシヤ
 ナルテン 南天(ナンテン)
 ゲンゲ 紫雲(レンゲソウ) れんげ
 ヨロボシ 土筆(ツクシ)
 タンポコ 蒲公(タンポポ)

イズ 柚(ユズ)
 ナスビ 茄子(ナス)
 ネブカ 葱(ネギ)
 ビンカ 犬黄楊(イヌツゲ) または生垣に用いる白厂楊もビンカという。
 シラサキ (非榊=ヒサカキ)
 キコク (枳殼) カラタチ
 オンパコ (大葉子=オオパコ)
 ツバナ (茅花=チバナ)
 ギバ (ぎぼし)
 ネジクリソウ (痰くり草) ネジ草バナともいう。
 モジズリ(緋摺)
 チワラ (茅=チガヤ)
 カラスイモ (カラスシャクシ、ハンゲ)
 ニゴ (和) 稻穂 粃のついていた部分
 ヤタ (やた) 脱穀して粃のついたまま切れたワラシベや、わらゴミといっしょになった粃
 ワラスベ (藁藁=ワラシベ) 稻の穂
 粃のついていた部分。又藁一本のことともいう。

ヒネゴメ (陳米) 1年前の米、古米。

サヤヌカ (糖) 粳がら

ウルシネ (粳=ウルチ)

普通飯米 延喜式和名抄では「宇流」の様、「ウル」は古代インド語の米の意でマレー語、台湾アミノ語に伝わり流れをくむ言葉。「シネ」は「イネ」の源語で「稻」と同意。

シイナ (粃) 死粳。実のない粳、或は極度に実の小さい粳(クズゴメ)。

お わ り に

長久手の郷土史として、郷土長久手に愛着をもっていただくものの一つとして「長久手の方言」が発刊されました。私ども長久手町郷土史研究会は急速に都市化する郷土の中で消えていくものを、残していくことが最大の願いです。幸い昭和59年4月に郷土史研究会が発足しまして、最初の課題として取り上げましたのが「長久手の方言」で今日刊行をみた次第です。

次は「長久手の芸能演劇」「長久手の石造物」と順次発刊の予定にしております。この「長久手の方言」の編集には町教育委員会の御指導を賜り研究会第三部会の日比野義信、山本鶴善、浅井千鶴子、中野十四夫、川本春一、加藤正時、川本勝美、坂谷茂 諸志の調査研究のご労苦は多大でしたが、編集委員はもとより未熟なものばかりで誤りや重複、脱落も多いかと思えます。機を得て後日改訂をしたいので、みなさまの御批正、御指導をお願い申し上げます。

昭和60年3月31日

長久手町郷土史研究会

会長 福岡 隼 三

長久手町中央図書館



00870085

A 8

